

露伴〈風流〉考

日 沼 滉 治

一 はじめに

この小論は、幸田露伴の風流観を検討し、それによって露伴の文学世界、特に「風流微塵蔵」を読み解く糸口を求めようとするものである。手順として、先行の諸説に従いつつ「風流微塵蔵」までの露伴の作を概観したい。そのあと、露伴その人が触れていると思われる事項のうち風流にかかわるものを取り上げ、いささか吟味しようとする。すなわち、概略つぎの項目である。

遊仙窟―浦島子伝説―西行―芭蕉―風来山人

二 心的動揺―諸説

幸田露伴の生前から没後にかけて、その半生および文学世界を展望し一次資料と直話とを伝えたのは、次の二著である。

柳田泉 『幸田露伴』 (昭17・2、中央公論社) — 以下、柳田著A

柳田泉 『幸田露伴』 (昭22・11、真善美社) — 以下、柳田著B

ただし、柳田著Aは晩年の露伴については四七「老龍片鱗」―、「大正より昭和に」の余章を伝えるのみである。刊行直後から新資料と直話とを加えつつ補訂を心がけていたが、一九四七年(昭二二・七・三〇)露伴の死をむかえた。かねて八十歳の寿を記念して柳田著Aの前半を「青年露伴」と題して出版する心づもりであったものを、急ぎ「幸田露伴」に改めたのが柳田著Bであり、旧稿の三〇「露伴時代」以下を欠く。すなわち二九「明暗ふたおもて」(「風流微塵蔵」)までであるが、柳田著Aにない新資料・直話・創見をくわえた。それら増補―改稿案―「青年露伴」の案―後半割愛、にわたる事情は柳田著Bの「はしがき」(昭和廿二年九月三十日、目次では「序文」)にくわしい。つまり、柳田著がA・Bともに作家時代の露伴文学に触れているのは、次の三章である。

「天才露伴子・その一期」(一六―二二)

「天才露伴子・その二期」(二三―二五)

「風流微塵蔵」(二六―二九)

すなわち、それら三章のはじめに文壇登場作「露団々」を置き、結びに未完の長編「風流微塵蔵」を据えたのが柳田著A・Bの構成であり、とりわけ読者の注意をひくのが次に示す柳田著A二一節の標題である。

風刺的諸作品・心的動揺

柳田著Bではこれに副題（「封じ文」）を加え、明治二〇年代の露伴に総体触れる論のほとんどがここに言い及んでいるので、事を見やすくするために露伴の心的動揺を示す明治二三年の言動を、諸説に従ってまとめてみよう（以下、小論における引用部分のルビは、おおむね省略）。

- 1 一月一日旅行を占って取りやめ三日まで籠居、籤も凶、月末まで心身不調
- 2 『読売新聞』明治二三年四月一七日号「宮崎晴瀾に与ふ」（「風流魔と称するもの近日成らむとす」）
- 3 『読売新聞』四月三〇日号「二椀の茶を忍月居士に侑む」
- 4 断食閉居
- 5 四月二四日鷗外・賀古・井上が見舞う（森銑三『明治人物夜話』（昭44、東京美術））
- 6 四月二六日「乗興記」の旅／六月二四日「まき筆日記」の旅より帰京
- 7 六月中旬／七月、「風流魔」上篇のみ学海・思軒が見る―春陽堂・金港堂出版を断る
- 8 六月三〇日赤城山地獄溪に籠もる
- 9 六月三〇日／七月一五日「地獄溪日記」（『城南評論』六月号）
- 10 七月一五日逍遙あて「地獄溪書簡」（『郵便報知新聞』七月二一日号・二三日号「造化と文学」）

- 11 「ひげ男」着手く中絶
- 12 「一口剣」(『国民之友』八月号)
- 13 『読売新聞』七月二日号「雑詠」(俳句・「欲剃髪」「不欲剃髪」など)
- 14 『郵便報知新聞』八月二五日(「旧露伴死し新露伴生る」)
- 15 「般若心経第二義注」(没後に知られた遺稿)
- 16 「封じ文」(23・11『都の花』)
- 17 一二月筑波山入り座禅

露伴のこの心的動揺について、小論の臆説を述べるに先立ち、諸説を掲げたい。

- | | |
|---------------------------------------|-------|
| 柳田 泉 『幸田露伴』(昭17・2、中央公論社) | 柳田著 A |
| 柳田 泉 『幸田露伴』(昭22・11、真善美社) | 柳田著 B |
| 岡崎義恵 『日本芸術思潮』第二巻の下「風流の思想」(昭23・6、岩波書店) | 岡崎著 |
| 塩谷 賛 『露伴の魔』(昭24・7、角川書店) | 塩谷著 A |
| 塩谷 賛 「解説」『風流艶魔伝』(昭25・3、角川文庫508) | 塩谷著 B |
| 笹淵友一 『浪漫主義文学の誕生』(昭33、明治書院) | 笹淵著 |
| 竹盛天雄 「露伴における魔と表現」(『国文学』昭49・3) | 竹盛説 |
| 登尾 豊 「対蹻體」論」(『文学』昭51・8) | 登尾説 |

石田忠彦 「露伴の中の『風流』」(『解釈と鑑賞』昭53・5)

石田説A

石田忠彦 「露伴の風流再説」(昭53・11、『近代文学論集』第4号)

石田説B

二瓶愛蔵 『若き日の露伴』(昭53・10、明善堂書店)

二瓶著A

二瓶愛蔵 『露伴・風流の人間世界』(昭63・4、東苑社)

二瓶著B

まず柳田著Aは、明治二三年一月の新聞『国会』入社をもって「天才露伴子」を一期と二期との二章に分かった。露伴の心的動揺は、『読売新聞』時代すなわち一期にあったとしたのである。二期の章は『国会』の時代であり、それらにつづく「風流微塵蔵」の章は二九節「明暗ふたおもて」をもって終わる。あの心的動揺はすでに過去のことに属し、この「明暗ふたおもて」(明28・1『国会』)の暗―「暗き方」に関わりないかのようなのである。「明るき方」―明がそれにつづき、露伴の結婚を言ほぎつつ柳田著Aは「露伴時代」の章に移る。のちに柳田著Bが「青年露伴」をここで切り上げたのは、それなりに筋の通ったことであった。

柳田著A・Bにつづく諸説のうち岡崎著はのちにゆずり、塩谷著B(「解説」)は云う――。風流は露伴にとって人生と文学における第一義的なもの、愛の本質、自己の発見、禅的なものであった。しかし「まだ信仰へまでの現実肯定を得てはゐない」ため、作品に先立つ疑惑や意欲がつきつきに仏・魔・神・運命などの作品となった。それが露伴の魔であり、魔の軌跡が象徴的な旅の意味である、とする。塩谷著Bはつづいて、空想的、宗教的心理の高潮を「毒朱唇」「真美人」「風流悟」から「新浦島」に及ぶ系譜に認めた。塩谷説でとりわけ注意したい見解は次の三つである。すなわち「旧悪の記録としての子のその親に対する関係」(「封じ文」)。「非的立場からの抽象された人間の問題」(「血

「紅星」)。そして始と終、仏と魔、の「循環的存在と価値の錯列」(「新浦島」)。なお塩谷説は初期に「風流艶魔伝」と「新浦島」を置き、中期に「二日物語」と「風流魔」を配した。その構図にも注意すべきものがある。

竹盛説はまず、迂人として虚の空間「風流」を選んで突貫した露伴の志想に触れる。旅の空間で幻視された露伴の想は「対髑髏」において「迷い」の逆説的な展開とそれに堪えるダイナミックな文体となった。すなわち「迷い」は、語り手「露伴」の迷いが乞食女の迷いに重なり、さらに悪魔的な業苦の迷いを媒介としながら聖なるものを示唆する。しかも、その聖なるものがわずかに一夜の幻として現れるところに、作者の痛烈な逆説―否定弁証法が読みとられる、とするのである。竹盛説は云う――、露伴年譜の明治二三年にうかがわれる動揺憂鬱は、「魔」の活性化にともなう自己規制の強さに発しているのではないか。その根元に斎藤紫英との挿話(笹淵著)を想いみながら「艶魔伝」の否定弁証法「二枚舌」から「風流悟」の弱々しさに言い及び、「魔」を対象化しようとする露伴文学の魅力を論の結びにしている。

石田説Bは登尾説を受けつつ、「たかが恋の不成就」が露伴そのひとの文学観や「風流」観にまで修正を迫った可能性とその理由について、美―醜、仮象―無、自―他、内―外、といった軸から検討し、露伴作品の「魔」に迫ろうとする。すなわち「風流仏」の風流―現実、善美―俗といった楽天的な枠組が破綻した、とする。石田説は、同時代の二葉亭「浮雲」における自他の対立〈模写主義〉をかえりみ、露伴の苦悶の内実、新しい「風流」産出の苦悩がそこにあった、と見る。「対髑髏」の構造には、美(仮象)から髑髏(無)へ、髑髏(無)から醜(仮象)へという往復運動が考えられ、やはり「色即是空、空即是色」という融通無礙の境地だったのではあるまいか、と云う。その分析の

軸は、話し手・聞き手・作品内部の自―他の構造に及び、むしろ「艶魔伝」のリアリティは、魔が折伏を拒否してしまつたところにある、この問題は「風流微塵蔵」(明26・1・26〜28・2)以降にもち越される、とした。

二瓶著Bは、柳田著B・竹盛説・石田説A・Bのほか次の二著をあげる。

日夏耿之介『鷗外と露伴』(昭24・6、東京創元社)

岡崎義恵『日本芸術思潮』第二巻の下「風流の思想」(昭23、6、岩波書店)

露伴の「蒟蒻本目録」(奈落三次『しがらみ草子』明24・4)などについても考証を加え、先行の諸説のうち特に石田説を引いて自己の見解を述べる。すなわち石田説では「対髑髏」における醜が「風流魔」では「魔」として把握された、とする。露伴にとって自己内外の魔の折伏が当面の課題となつたが、魔が折伏を拒否し、人間の肉体の業が立ちふさがつた。葦野花子が好色魔に籠絡される予感がある、というものである。二瓶説はその石田説を受けて、両刃の魔性の予感による「風流魔」の挫折こそ露伴の動揺の根元であつたろう、とする。「風流悟」(明24・8『国民之友』付録)について北村透谷「我牢獄」「厭世詩家と女性」への影響を述べ、「縁外縁」「封じ文」に結婚否定・肉欲否定を認めるが、露伴の実生活をめぐる恋愛破綻の説(笹淵説)には慎重である。つまり二瓶説は、露伴の心的動揺には霊肉葛藤のテーマが潜んでいた、とし、「対髑髏」では白骨という否定的媒介によつて観念的に美化超脱された肉体愛、「封じ文」では子供を旧悪の記録とする罪業観によつて否定された肉体愛の問題がある、とした。二瓶説は、これら肉体愛の否定は仏教の戒律とキリスト教の両方から来ているとし、特に「封じ文」と「二日物語」の二作品に注意したものである。かえりみるに二瓶説のキーワードは「恋の成就」「旧悪の記録」「悪露」にあつたようである。

三 風流—仏—魔—呵—悟

以下に小論の臆説を述べたい。露伴の心的動揺は「天才露伴子・一期」にかぎった事件であったのだろうか。

柳田著A「明暗ふたおもて」の特に「暗き方」を読むかぎり、露伴の心的動揺が「天才露伴子・その二期」のとは口でめでたく終息したとは考えにくいのである。げんに「風流魔」と「呵風流」とが、このあとも露伴を悩ますからである。「風流魔」は昭和二年の末まで持ち越され、「呵風流」は明治三四年に「二日物語」として陽の目をみるまで書き継がれた。大略つぎに示すとおりである。

○風流魔（原題）

腹案

艶魔伝腹案（風流魔の一節）23・4—5（「宮崎晴瀾に答ふ」—露生23・4・17『読売新聞』）

広告

閻魔伝23・9脱稿（紅葉「此ぬし」新作十二番の二の奥付広告）

序・記

流魔自序23・11・25国会

風流魔記24・2同、風流魔31・8—春陽堂拒否・金港堂不首尾

・風流艶魔伝24・2しがらみ草子17号

予告

安藤俊信（予告『新著百種』）23・11『日本人』6号広告

恋の俘（予告）29・12『新小説』第1年卷1

恋の俘（予告）30・12『新小説』2年13卷

恋の俘（予告）31・1『新小説』

・帳中書31・8『新小説』（雑録）

・名古屋だより34『長語』

・風流魔S2・12『幸田露伴集』（『現代日本文学全集』）

○呵風流（原題）

・二日ものごたり「此一日」く其五25・5『国会』

・二日物語「此一日」其五く31・1『文芸倶楽部』

・二日物語「彼一日」34・1『文芸倶楽部』

原題「風流魔」が、はじめ「風流悟」と対で構想され、原題「呵風流」が後に「二日物語」の「此一日」「彼一日」の対で決着した。それを思えば、事はすでに風流なるものの構造にかかわっている。実生活——失恋や結婚が、何ほどこか露伴そのひとの風流観をうながす機縁になったとしても、事はすでに実生活の埒を越えていたろう。また一作・一時期をかぎった煩悶と悟達の図式をもはみ出していたらう。風流とかりにも題する文学世界である。原題の「風流

「魔」と「呵風流」がともに風流をうたう以上、その構造に総体かわるものこそが問題にされなければなるまい。いまかりに時期を『露団々』から「風流微塵蔵」までに限った場合、露伴の心的動揺と、その動揺を星雲状にとりまく風刺的諸作品とがいちじるしいのである。それらを通して見えてくるものを云えば、「風流魔」と「二日ものがたり」をめぐる作者の苦心経営、に極まるであろう。

露団々（明22・1『都の花』）

風流魔（風流艶魔伝―風流仏）

心的動揺

呵風流―二日物語（此一日・彼一日）

風流微塵蔵（明26・1〜28・2『国会』、明35・2合作もつれ糸）

「風流魔」と「呵風流」、両作の構造を顧みよう。「風流魔」について柳田著Bは新たに直話を加えて次のように述べている。

「風流魔」は、この題の方が初案で、最初から安藤平七のことを書くつもりであった。つまり「風流仏」に対する趣向として、「仏」の方が思ふ力のつよさで誠が通つたのに対し、「魔」の方は、いかに思ふ力がつよくても何ともならぬことがあり、それが平七の悲恋の場合であるというので、さういふ腹案を立てた。

風流―仏に対する、これは風流―魔であろう。世話物である。細工問屋の娘お浜は平七との間をさかれ、江戸で思わぬ男の機嫌をとらされることになる。お浜は仕返しのため、処女から大毒婦に化けようと一念発起して老艶魔と聞こ

えた人物に男たらしの秘伝を問う。その一節が「風流艶魔伝」であるが、ついに艶魔にはなりかね、名古屋にもどつて平七と心中する――。

一方、初題「呵風流」が次第に「二日ものがたり」の構想をとつていく経緯は、柳田著Aが伝える当時の予告と社告から憶測できよう（二四節「明治廿五年」）。

来る火曜日より露伴子が本年始めての構思執筆にかゝる「二日ものがたり」即ち、呵風流を掲載すべし、山と雲と、幽鬼と詩僧と瀟洒たる草屋と明滅する孤燈と解脱を重んぜざる猛士と流転を免れむとする美人とは一日一日紙上に現はれきたりて特に読者に見えんとす（明24・3・13『国会』―社告）

柳田著Aの三五節は「二日物語」「椀久物語」「帳中書」を一括してその節の標題とし、先の二四節「明治廿五年」をうけた形をとつていたが、柳田著Bでは割愛された「露伴時代」に属する部分である。それだけに明治二五年が尾を引いていたとは気づきにくい一節である。しかし、明治三年のこんな時節にあの「呵風流」が「二日物語」（此一日）に姿を変えて、ここ「帳中書」に身をやつした「風流魔」と同席していたのであり、露伴の苦吟が思われよう。「二日物語」の人物は西行、時代物の世界である「此一日」は源平闘争のころの白峰の御陵を舞台に、崇徳上皇の怨霊が叱咤する、いわば呵―風流。「彼一日」の場面は王朝物語をおもわせる長谷寺であり、恩愛ある旧妻とその子に悟道をさすとす、いわば悟―風流にあたろう。王朝文化と源平闘争とのほさまにあつて庵居と遊行とに生きぬいた西行そのひとの、これも風流のありようにちがひなかつた。

以上をかえりみるに、仏―魔―呵―悟が風流をめぐる交錯していたと見られ、それが露伴居士の、「心的動揺」と

呼ばれる煩悶の輪郭ではなかつたらうかと考えられるのである。

世話物 — 仏 — 魔

風流

時代物 — 呵 — 悟

すでに露伴の心的動揺の輪郭は見たとおりであるが、当年の露伴の文章によってその内実を検討しよう。「靄護精舎快話」(明23・12・26—24・1・14—8・1—8—30—9・1—5—30—10・22新聞『国会』)の其三十五に次のような文字が見える。

一二年來ひそかに念ふところありて、日を重ね月を重ねるに随ひ其念やうやく切なれども未だ果すことを得ず。(中略) 地獄溪に潜み霧積山に隠れては徒に独照記葛藤録等をなせるに止まりしが(中略) 忽然箱根に到り去り、箱根におけるこの回想によれば、露伴の動揺は遅くとも明治二二年中に兆していたのであり、この年も元旦から旅に出ようとしたが、易经やら浅草寺境内の籤やらで占つてぐずぐずし、一月中を無駄に過ごしたようである。「一椀の茶を忍月居士に侑む」(明23・4・30『読売新聞』)にはこうある。

芭蕉翁の心は予いまだ考ふるあたはず。西行法師の心も中々に考へ及び難し。(中略)居士知るや古人句あり、風流の初や奥の田植歌と。我はいまだ能く蕉翁が風流の用心を知らねど、

地獄溪の前、すでに芭蕉や西行⁽²⁾や禅僧の売茶翁(一六七四—一七六三)に心を寄せており、『おくのほそ道』須賀川の「風流」句を書き付ける。「地獄谷日記」にも「風流」の文字と須賀川の芭蕉句「軒の栗」が見える。そのころ露伴の

風流は、電信技手の職をなげうって北海道の余市から脱出した明治二〇年八月のあの「突貫紀行」、郡山・白河のあたりを駆けめぐっていたようである。

七月二日（中略）深夜兀坐すれば、心身澄み渡りて妄念雪の火に逢へるがごとし。欣喜眠り難く、山中の風流を称しながら夢に入る。

七月三日、（中略）雨やまずして霧ふかく、我心の如く濛々たる天気、気分はなはだあし。丁度栗の花の風情を一昨日の途中にて初めて能く知りたるなればその花をおもひ、且又、世の人の見付けぬ花や軒の栗といへる翁の句をおもひ出しぬ。（中略）飛ぶ蝶に我俳諧の重たさよ 此句吾意を得ること深し。

七月七日、一日、静坐す。

そのあとの七月十日と推定されている坪内逍遙あて書簡にも「風流」の文字が見える。当年の露伴が近世の小説と俳諧のうち芭蕉に惹かれ、栗や蝶の縁から莊子や西行をゆかしく思っていたという、その風流の実相をうかがわれよう。小生は先々月あたりより何となく悲しく今に呻吟ひとり悶え居り候（中略）元来小生は其前は兎も角文筆にたづさはりし此方常に一心風流々々と目ざし居るを発見し

「小説を作りし事の今までは残らず大無風流」と懺悔し、「鶴翁は外より見蕉翁は内より見て」と西鶴と芭蕉をひき比べ、「芭蕉翁に付ては頃日研究いたし色々心付き候事ありて愈々我耻かしき事のみ候」ともらし、「真風流」という考え方をしめしている。そのあと「我か夢を蝶の出ぬける山家哉」という句を披露し「風流第一は生死関頭に妄想を切る事と考へ候」と云いきっている。

露伴の思考そのものに何か変化が起こったものようである。やがて七月一四日の遅塚金太郎（麗水）あて書簡に次のような「変なる歌」が記される――。

世はしら露の 我か涙あり（中略）其涙 琥珀ともせじ 珠ともならじ 唯露で候

「突貫紀行」や「縁外縁」（対髑髏）に暗示された雅号の由来と野宿の来歴、露伴の露そのものをめぐって、思考の組織が変わったものと見える。露伴の死後に発見された当時の「般若心経第二義注」（明23・8）。それは直接に露伴の風流を語るものではないが、仏―魔―呵―悟の循環と輪廻を説いて凱切、余すところがない。たとえば、「色不異空、空不異色、色即是空、空即是色」について露伴みずからが云う――。

露伴の色身が露伴か、露伴とは即ち此色身の事か、ちと怪しきやうにおもはる。

「受想行識亦復如是」においても懺悔する――。「湯気にあがりたるは垢づきたるより猶悪し。」

我も一年ばかりは湯気にあがりて、人跡なき深山の笹小屋に徹夜の坐禅など役だたぬ業を悦び、酒の肴に楞嚴經を読むなど白痴を尽したれど、幸にして浮世の冷水に脳天をひやし、色不異空だけ見て空不異色に眼をとめざりし故なり。（中略）仮令我も人も大悟なしたりとて雪白く水青し、唯の人と何の異なるべきや、たゞ凡人は湯に入らずしてもとの人、道に志をたて、成就せば湯を出てもとの人なり。

笹小屋・楞嚴經などの語を見るかぎり、風流はともかく、風流悟の「湯気」は北海道の余市時代からあったものらしい。しかし、「無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界」を注する露伴はすでに「意」と「法」との弁証法をあらかた見届けていたものようである。

此六根六塵の區別は明かに知るゝなれど、意と法とは少し面倒なり。意とは是を第六意識と呼びて、此奴が大きな威力ありて我等を地獄に落すなり。

「法とは意に攝らゝものなり」といい、阿難尊者と摩登伽女のことにはふれる。すなわち楞嚴經における肉体愛の問題、靈肉葛藤の問題とおぼしい。「意」は、と露伴は注する。

反覆表裏、雲か水かの如し。かゝる意にて法に執着し、恋しい憎い嬉しい悲しいと煩惱すること、あるまじき沙汰の限りなり。又、意といふものは偏倚のものにて、極めて片よりたるものなり。(中略)此奴魔王にて中々大威力を有するもの故、是を能く馴らし従へなば役に立つ事非常なり。

露伴は、嘲罵・悪態・風刺にとまなう否定弁証法のからくり、意識が墜ちこむ無限否定の地獄をみてとった――。

是れ外道は意に使はれ居たりし故、然りと答ふる時は我が前の意見を破するやうになり、否と答ふる時はまた前の意見に違ふやうになり、直ちに自分が持ち出したる大毒蛇に自分が吞まれて一句もなき事となり、閉口したるなり。如是して恋もまた意より忽然と湧きたるは、詰り空なり、金剛不壞の恋にはあらず。

意と法との反覆表裏する趣きを見てとった以上、「風流悟」(雷音洞主―明24・8『国民之友』一二七号夏期附録)に安住することなど、およそ露伴には考えられないことであつたらう。げんに「虚子が言について」(明24・8・19―20―21『読売新聞』)という一連の険しい時文が残っている。

虚子曰く、(中略)願ふに予が涙の風流悟に墮ちし所以の者は予が眼の吾亡妻に紅化せられしが為にはあらざるか、云々。笑ふに堪たり笑ふに堪たり、又憫むべし悲しむべし、虚子は読書の法さへ知らざる人なり。

宮崎三昧「吾亡妻」とわが「風流悟」とを重ね読んだ高浜虚子にすでに露伴はいらだっており、つづく虚子の言にかみつく。「予は明かに作者が実に風流悟中の人たるを認めんとす、如何となれば予も亦実に曾て風流悟中の人たりしことあればなりと。」——露伴は虚子が想像するような境にいたわけではない。そのあと、「虚子が言について」について（雷音洞主—明24・8・29『読売新聞』）という、標題自体が入子型のくどくどしい文まで書いているのである。

虚子が言について三日間も既に文苑欄内を借りしが、（中略）一度ならず二度ならず三度までも我が家訪ふて、御手やわらかに願ひますと伝言を託したる人あり、即ち虚子なり。（中略）虚子が言を納れて乃ち我が言を中止す。思うに、露伴の雷音洞主「風流悟」は仏—悟を語りはしたが、風流の全容を示していたものではあるまい。むしろそれに先立つ「封じ文」（明23・11『読売新聞』）と「血紅星」（明24・7『民権新聞』—『尾花集』）に注意したのである。

「封じ文」は、閉居精進する幻鈎居士のもとへ旧妻の忘れ形見が遊行してきたって仏—悟と呵—魔との輪廻を幻出する。「心的動揺を経験した露伴の懺悔録と見るべき作品」と柳田著Aが云うとおり、露伴の一段落した境地だとは考えにくい内容であるが、大夜叉がつぎつぎに幻鈎居士—大夜叉を呑み込んでゆく入子型の輪廻に、『露団々』『風流微塵蔵』の構造を読解するかぎが潜んでいよう。

一方、「血紅星」には皆非居士なる詩作三昧の人物が登場する。すべてを否定し嘲罵して安房の雁行山に閉居、たまたま月宮殿に導かれて淹留する。淹留、すなわち、ながく留まることである。はては「皆非先生御自身」という題詠を求められて驚き、虚空を落下して血紅星になったという筋であり、これもまた呵—魔、嘲罵・悪態・風刺の無限循環

であろう。その皆非居士がうそぶいた言葉がある。

高が悪露を吸ひ取るだけの効能しかない女に向かつて恋ぢやとやら情ぢやとやら下らぬ詮義を尽し

入子型の輪廻・墜落、そして露。みずから号して露伴といい、作中に嘲罵して悪露という。かえりみて小説『露団々』における露もまた尋常一様のもではあるまいと思われる。その団々たる露は、蔵海に去留する微塵でもあろうか。

『露団々』は、概括すればブンセイム、ルビナーシンジア、吟蝸子、の三者を枢軸にした作品と考えられ、それは事業・信愛・風流の織りなす世界でもあつたらう。

事業（東西）　ブンセイム

風流（東洋）　吟蝸子（・タイラック）

信愛（西洋）　ルビナー・シンジア

だが、作品『露団々』は大枠の冒頭と結尾に謎めいた仕掛をのこしていた。冒頭に「例言」をしめして、「凶悪勇悍佞毒妖怪の男女」や「戦争自殺淫猥偷盗の事件」をしばらく封じたことわつた一方で、結尾にかく言う。

兎にも角にも取るに足らざる小冊子のいとも果敢なき物語なれども色をも香をも知る人ぞ知る、と云ふも烏澁なり、と云ふも烏澁なり。

露伴の文学世界は、文壇登場作のそもそもから「呵―魔」の悪態・嘲罵・諷刺などをはらんでいたものであり、それを冒頭に封じこめ、結尾でまた二重に「烏澁なり」と封じこめる入子型をとつていたとおぼしい。「露団々」という標題がその作品の構造をまで寓していたとは云えないが、のちの長編「風流微塵蔵」にいう微塵―蔵はすでにここに兆

していたものであろう。その意味で、吟蛸子やタイラックの淹留と帰還、あるいはルビナがシンシアに送った封じ文は、風流の構造に何ほどかかかわっている。なによりも水辺の女人ルビナを設定したところに遊仙窟の説話に通うものがあり、その限りで封じ文は浦島子説話にいう玉手箱の様相を帯びてくる。

四 風流の原義

近代文学における露伴のみならず、古今にわたる風流の思想を総体あつかった先駆的な労作をここで顧みたい。

岡崎義恵 『日本芸術思潮』 第二巻の上 風流の思想 (昭22、11、岩波書店) ——以下、岡崎著A

同 『日本芸術思潮』 第二巻の下 風流の思想 (昭23、6、岩波書店) ——以下、岡崎著B

うち、上の岡崎著Aは近世までの風流、下の岡崎著Bは露伴など近代文学の風流にあてている。岡崎著Aは冒頭の章「風流の原義」で『和訓栞』を参照しつつ『佩文韻府』の用例二三例を、『辞源』の定義にひきあてて六項にまとめ、日本の諸種の辞書とも照合したものである。

- (一) 風流余韻也。(佩文韻府第一・九例)
- (二) 言儀表及態度也。(同第二・七例)
- (三) 品格也。(同第十五・十一例)
- (四) 猶言風光榮寵也。(同第十七・十八例)

(五) 不拘守礼法。自為一派。以表異於衆也。(同第三・十四)

(六) 精神特異之處。(同第十三例)

その(一)「風流余韻」は、

「風」も「流」も先王の優れた風化のなごりが後に伝へられて存してゐることであるらしい。

と考察したあと順次(二)(三)の例を検討し、若干の感覚的魅力と性的・情的蠱惑力とを含んでいる場合があるようである、とする。(五)は風雅・みやび、雅致の超俗非凡、独特の高邁なる精神的境地を持つること、浪漫的性格と解している。

(四)の「猶言風光榮寵也」については、日本の辞書にある「みやび」という解釈で足りるか、とする。また「佩文韻府」の例にうかがわれる風流隱士(道家・禪客)の風格には、むしろ儒教的・政教的に原義に近いものがあるとする。作品の様式や流儀、つまり「さま・ふり」も、芸術におけるそれら特異な用例とするのである。以上の検討を経て岡崎著は「風流」一般の原義について次のように結論する。

支那古代の根本的意義は優れたる精神文化的価値の存する有様といふことである。

すなわち「風流」は、政教的から倫理的・美的へ、またその所在は、天下の民俗・特定の個人・自然物・芸術品等へと広がった。後世には狎妓、清隱の風、などにも転じたとするものである。

ちなみに岡崎著Aは、つぎに示すように冒頭の「風流の原義」以下の一六章より成るが、いずれの標題も、露伴文学の創作と史伝・考証、ことにその風流と重なることが予想されるものである。

風流の原義、雅と風雅、「みさを」と「みやび」、平安時代の風流、中世における過差とばさらの風流、中世の歌

舞演劇における風流、茶道の風流と「すき」、書道・楽道・香道・花道の風流、一休宗純と五山禅林の風流、俳諧の風雅と風流、画論における風流、国学者及び近世歌人の「みやび」と風流、近世小説における風流、近世の歌舞演劇における風流、近世随筆の風流観

なお岡崎著Bは次の章から成る。

露伴、明治大正の小説―特に鏡花「風流線」と虚子「風流懺法」、子規、漱石、明治以後

ただし露伴に関するかぎり、昭和二年の第一次全集（岩波書店）によっており、論述に限界がある。また、個々の作品にそのつど風流の悟達を求める傾きがあり、露伴の全貌がつかみにくい。むしろ、露伴文学の本質が風流にあると認めたとその見識は、諸家の論考にうけつがれてそれぞれに展開された、と見られるものである。

岡崎著が文芸学の立場から、文芸思想「風流」の語義を個々の用例に即しつつ吟味して、半世紀にちかい。同じ文芸思想を比較文学と文芸史の方法で通観した次の大著は、「風流」の消長と露伴文学の座標とを見定めるうえにも顧みなければならぬものである。

小西甚一『日本文芸史』（I'85・7、II'85・10、III'86・4、IV'86・10、V'92・2、講談社）――以下、小西著A

小西著Aは、「序説」「三 方法としての時代区分」の(二)で時代区分の「指標」を示している。すなわち「雅」「俗」「雅俗」を指標として古代・中世・近世を分かち、古代第一期は「雅」（典型）の意識をもたない「言霊」（俗）の時代、古代第二期は漢籍を「雅」としはじめた時代、とした。

中世は「雅」とするシナ文化によって、六朝的な「風流」、唐代的な「道」、宋代的な「情理」、に分けられた。中世

第一期が「雅」としたのは公的には儒教、私的には道教の精神で生活する「風流」であり、この時代は『古今和歌集』という「雅」をみずから持つことができた時代である。「風流」の内容は白楽天にあっては琴・詩・酒・妓、わが王朝貴族にあっては音楽・詩文・興宴・女性との交流であった。「風流」の高度に洗煉された美が「艶」。作品としては『源氏物語』であり、道長の時代が十三世紀以後の人士にとつての古典となった。特に宮廷ふう洗煉された「艶」が「優」ともいわれ、「優艶」美を基調とする新古典主義の一方で、「俗」がプラスの意味をもち始める。老荘的な「朴」・「拙」が禅を媒介にして「わび」「さび」の内向的な華やかさ・豊かさを含むようになり、「雅」と「俗」を実践的に統合した「道」に専門性・継承性・規範性が与えられたが、そこには天台宗の止観からでた禅宗の「一即多・多即一」が考えられる、という。

露伴文学の風流には「俗」と禅宗の趣があるので、特に「風狂」について次の論考に耳を傾けたい。

小西甚一「風流と風狂」(『岩波講座 日本文学と仏教』第五卷「風狂と教奇」第四章、94・9) — 以下、小西著B

冒頭、小西著は風雅・風流・風狂を区別する(一「風」の原義と訛用)。風雅の「風」は歌謡、とくに地方歌謡。風雅とは、国の政治や文化に関わるような詩ないし文芸。風流の「風」は語源不明。風狂の「風」は精神異常の状態。「二」風流と風狂の原義」の「一六朝—唐代の「風流」」の趣旨は、小西著Aの中世第二期において公私を使い分けた琴・詩・酒・妓の生活に相当するものであろう。「二六朝—唐代の「狂」」は、規格はずれがプラス評価された代表にいわゆる竹林の七賢をあげ、そこに漢民族らしい二元主義をみている。「三 風流と風狂の転義」の「一風流の日本化」

は、岡崎著Aや小西著Aと扱ふ時代がかさなる。「すき」・人工的な美しき(工夫や趣向のみごとさ、装飾的な美しき)・美しい飾り物——。「2風狂の日本化」では、風流の意味が十五世紀ごろから曖昧になってきた事実と関わるところがあつたと考えたい、と結んでおり、これは露伴の風流にも及ぶ主題であるう。

五 遊仙窟

つとに露伴は遊仙窟⁽³⁾や浦島子説話に関心をもっており、まとまった文章としては、次のような考証と作品がある。

遊仙窟(明40『蝸牛庵夜譚』)

新浦島(明28・1『国会』)

その学和漢を兼ねた趣きは、露伴「遊仙窟」の初めに掲げてある内容の小見出しから人名・作品名・書名を抜き出すだけで推知することができよう。

竹取物語 遊仙窟 源順 和名類聚鈔 公任 和漢朗詠集 基俊 新撰朗詠集 万葉集 大伴家持 契沖阿闍梨
 山上憶良 西行 唐物語 則天武后 平康頼 宝物集 張鷟^{さく} 朝野僉載 唐書 洪容斎 蘇老泉 孟子 李杜
 張易之 張昌宗 張行成 張文成 竜筋鳳随判 四庫提要 陸佃 俾雅

たとえば岩波文庫の『露伴随筆集』(上)考証篇(寺田透編、'93・6)は一六頁一六五項目にわたる注(小山弘志)を用意しており、小見出しと注に洩れた固有なことに和漢の古辞書と書誌学とに結びたい。いきおい、「万葉集」

以降の「遊仙窟」受容——風流の解釈に事は及ぶだろう。それにしても露伴そのひとの考証は、あらまし、どのようなものであったのだろうか。

しばらく池田利夫『日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠』補訂版（昭49・1、笠間叢書39、笠間書院——以下、池田著）を参照しよう。池田著は、「第九章 翻訳説話の役割」の「二 翻訳説話の周辺」で露伴にふれている。いささか長い紹介になろうが、以下、『遊仙窟』研究史における露伴の位置を知るよすがとし、かつはその引用文をとおして露伴考証文の片鱗にふれことにしたい。

「二 翻訳説話の周辺」に先立ち、池田著は「一 張郎武后譚の生成」を設けている。すなわち、『源平盛衰記』巻第四十八「女院六道廻物語事」（有朋堂文庫本）が則天武后——張文成の情事と遊仙窟にふれていることに注意し、平家物語諸伝本を吟味することから始めている。この情事を伝えるのは、初期の増補本と見られる諸本のうち四部合戦状本が一四字のみ、盛衰記と同系の後期増補本でも延慶本「建礼門院之事」にわずかの文字が認められるが、巻五「文学力道念之由緒事」が詳しい、という。同文では張文成を潘安任にかかわらせて「母方ノメイ」とし、情事にちなんだ源光行の歌も記されている——。光行は中国の故事を伝える説話を題詠しており、池田著の研究は総体それらに関わっているが、さて光行が詠んだという張郎武后譚の原拠は何であったのか。

池田著「二 唐物語第九話の典拠」はそのことから露伴の考証に及んで行く。

明治四十年十一月発行の「蝸牛庵夜譚」の「遊仙窟」の項で、幸田露伴は二人の関係に就いてもつぶさに論及している。露伴は源平盛衰記や延慶本など平家物語の記事には気付かなかったようであるが、唐物語と宝物集の例

をあげ「その扱るところあるを思はしむ」とし、「然るに惟に張文成と武后との伝にその事なきのみならず、小説野乗もまた之を記する有るを見ず、殆ど形跡の尋ねべきなし。奇といふ可きなり」と論じている。それでも露伴は、唐書をはじめ朝野僉載その他の漢籍を涉猟し、文張成の出自、文才、性格を検し、則天武后との関係に就いては、

以下に露伴の考察を伝え、池田著はさらに露伴紹介の論文を結ぼうとする。

結局露伴は、この話を相伝の「人々口耳相伝へて伝来既に久しきも其の由つて出づるところを知る無き者か」、或いは誤伝に帰するかという。誤伝とすれば、

とつづけて、張易之張昌宗兄弟との混同か、あるいは張行成との誤りかという露伴の臆説を紹介し、ついで、

「千年以上の私事、要するに之を詳らかに難し」と嘆いているのである。ところが、この典拠をめぐって幾分の手掛かりとなりそうな記事が全くないではないのである。

とする。ここで「詳らかに難し」とあるのは「詳らかにし難し」の写し違いであろう。池田著は、狛近真の撰する音楽書『教訓抄』十卷（底本―天福六年書写の奥書を伝える山田孝雄校合本）を披露する。すなわち唐物語とは別系統の武后張文成情話があったという典拠である。『三臺塩』なる曲が武后になるということ、その話の出所が『醉郷日月』（皇甫松の作？）なる書物であること――。結局、池田著は「遊仙窟の著名度に比較すれば、三臺塩はやはり特殊であり影が薄くもなろうというものである。」と結んでいる。

露伴が『源平盛衰記』や延慶本など『平家物語』の記事に気付かなかつたのは事実としても、明治四〇年の当時す

でに露伴「遊仙窟」の考証が確立していたこと、上に見るとおりである。しかし、日中にわたる風流の語義に及ぼうとはしなかった。『遊仙窟』がなぜか中国本土に伝えられず、日本に運ばれて宮廷の人士に秘かに愛誦された事実を、露伴は心得ていた。考証「遊仙窟」の小見出しが示すとおりである。日本の風流は、中国六朝から唐にわたる風流の語義を律儀に輸入し、宮廷文化を彩っていたはずである。だが、露伴は『遊仙窟』風流の語義の考証家であるよりも、創作「新浦島」の作者であることのほうを選んだ気配である。なぜであろうか。

六 浦島子伝

重松明久『浦島子伝』の「解説」(81・1、古典文庫55、現代思潮社——以下、重松著)は、露伴の「新浦島」を近代文芸に位置づけて次のように述べる。

まず明治二十八年幸田露伴の『新浦島』が発表された。露伴は神仙思想や道教について深い関心を示している。露伴は「神仙道の一先人」「道教について」「墨子」「芳野の仙女」などの論考をのこしており、神仙思想の研究に多くの業績をもつ。『新浦島』は江戸以来の文芸物の伝統をうけつぎ、露伴が想像の翼を広げて書いたものである。重松著「解説」は、それにつづけて鷗外の『玉篋両浦嶋』、逍遙の『新曲浦島』、『長生新浦島』、『武者小路実篤の『浦島と乙姫』(『新潮』)をあげる。浦島子伝説を近代に蘇らせた筆頭に露伴はいたのであり、浦島子伝説に何かそれを促すだけのものがあつたのだと思われる。

重松著「浦島伝説の性格とその変容」に拠れば、浦島伝説は、奈良時代頃までに恐らく三系統が出現していた、と推測される。すなわち、

単純な神仙思想のみえる『風土記』系

竜神信仰—海人系海宮遊幸説話（藤原浜成）の『万葉集』系

道教系の『古事談』所収『浦島子伝』

の三系統がそれである。重松著はいう——。竜神的海人系浦島説話は後発的である。浦島伝説の本来の姿は、神仙思想の産物としてみるべきものであり、二種類がみとめられる。

漠然と神仙思想の衣をまとったのみの説話

金丹服用をとく道教説話

重松著はこれらを、蓬萊山・亀・仙薬、の要素に分解して検討して楽土淹留の様相を吟味する。高木敏雄の説にいう『史記』『漢書』『玄中記』『駕洛国記』『三国遺事』をあげ、神仙思想との関係では松村武雄説にある『唐様浦島』『酉陽雜俎』『列僊伝』『述異記』に触れ、出石誠彦が示した『博異志』（晋代の陶潜の著？）から滝沢馬琴『燕石雜志』におよんで、事はようやく『搜神後記』の作者、陶淵明に近づいた模様である。

重松著は柿村重松説を引き、『文選』の洛神賦—『古事談』の系譜に注意し結論にうつる。——浦島伝説そのものは、『搜神後記』の系譜をうける海宮往訪譚にあり、最も古いと考えられてきた『万葉集』系は意外にも孤立している。室町時代からはじまった竜宮譚は、『古事談』本から『文選』にさかのぼるものであり、道教系である。では、単純な神

仙思想のみえる『風土記』系―海宮往訪譚を伝えた宗教的背景はなんであろうか。

浦島伝説は、伊勢における宇治土公猿女君との関係をモチーフとして、恐らく宇治土公の出身地と思われる丹後与謝郡辺りの地において、直接的には宇治土公の出自氏族と思われる日置氏らにより、原初的に構想されたものであろう。(浦島伝説の宗教的背景)

古態をとどめるその『風土記』系―海宮往訪譚における風流が問題である。重松著は前田育徳会尊経閣文庫編刊『日本紀』12収の本文を、次のように読み下している。

為人姿容秀美。風流無類。

人と為り、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。

かつ、風流に注釈して次のように述べる。

心が風雅で、詩文などの教養もあり、俗人をこえていること。

用例として『遊仙窟』を引き、「風流之士」の注釈に『晋書』「殷浩伝」から、

王夷、甫先朝風流士

以下を引いているので、風流の意義もおのずから『遊仙窟』の風貌をおびること明かであろう。この読点のままでは「王夷、甫は」などと読むほかないが、晋の王衍、字は夷甫あざなのことを述べた箇所である。当人は美貌と清談で知られた才子である。従兄弟に竹林の七賢の一人で知られた、王戎がいる。

その点、気づく事は『丹後風土記』の浦島子に風流の文字が二度みえていることである。が、高橋虫麻呂の『万葉

集』卷九の長歌以降、風流の文字が浦島子伝につかわれなくなる。風流は浦島子伝を離れて、古代宮廷の『遊仙窟』に専有されたのであろうか。風流そのものに何かが起こったものと見える。

風流は、結局のところ中国本土の「風」「流」の音・義にさかのぼるだろう。白川静『字統』(84・8、平凡社)によれば、「風」は卜文の風の字形では、鳳形の鳥の形で、その右上に声符として凡の形を加えていることがある、という。『説文解字』が風を八風に分かつ説について、卜辞や『山海経』などを参照して批判したあと、「卜文の風が鳥の形、それも鳳の形でしるされているのは、風はその神鳥の羽ばたきによって起こると考えられていたからであろう。」とし、次の結論を得ている。

風がもと方神の使役する鳥形の使者であること、方神の意を受けて、これをその地域に宣示し風行させるものであること、これによつてその地域の風土性が特色づけられ、その土俗が規定されるものであるという觀念が、古く存していたことは疑いない。これによつてその風土・風俗が規定され・風光・風物・風味が生まれ、その地に住む人の性情にも深く作用して、風格・風骨を形成するとされたのであろう。それが歌詠に発するものは風、すなわち民謡である。(中略)風は自然と人間の生活との媒介者であり、その生活の様式を規定するもので、そのような営みを風化といい、風流という。

一方、「流」について、正字は二水の間にな(流屍)を加えた形、という。

流屍の字は、古く初生児を水に投棄する俗、あるいは生子を一たび水に投じて、その浮沈によつて養否を定めるような俗があつたことをも、考慮すべきであらう。

という。

邪悪の神を四極に封じて、その呪鎮とする意をもつものであるが、(中略)のち罪によって遠方に移すことを流刑という。(中略)もと流屍の意より水流・流派・流移の意となる。上に風行の風あり、下に流変の流があつて、風流となる。わが国では風流は仮装して群舞する祭事の芸能を意味するが、その起源は神々の遊行、神遊びに発する。

つまり風流の原義⁽⁴⁾には、荒々しい中国の風水観が秘められてあり、『遊仙窟』をいま一つさかのぼった桃花源に想いが及ぶ。『万葉集』以来、日本の宮廷人があこがれた好色・情事・優雅とは趣きを異にした、けわしい風流がここに立ち現れた感じである。

大室幹雄『桃源の思想——古代中国の反劇場都市』(84・3、三省堂)「塙堡と桃源の地勢学」によると、後漢末のたとえば劉備は流民の集団をひきつれて山林に逃れたが、そこには諸葛孔明の屯田の理念がはたらいていたという。

当時、混乱の極に達していた首都周辺の各郡、おおまかにいって関中・関東と称された黄河中下流の北中国からみて、南方の長江流域の荊州はまだ相対的に安定していて、庶民と士人の別なく北方から流民として流れていった。

という。荊州は、劉備が自立した土地として知られる。

塙とは土を小高く盛りあげて築かれたどて、つつみ、土塁を意味する。地勢が險阻で、岡巒が起伏し、河流が環繞して防衛に容易な山地、しかも開墾して耕作し自給自足することが可能な土地、つまり水源のある山中の平原

か谷の水源の平坦地を選んで建設される。

そこにはたらく反都市理念にはそれ自体の歴史や伝承があり、あの陶淵明（三六五？—四二七）の『桃花源記』は、まさにその記念碑だった、と大室著はいう。そこには、いくつかの特徴がある。支配的な指導者がいない、塩・鉄・酒にこと欠かない、歴史がない。そうした半神話的な異境を鮮明に造形しえた陶淵明の独自性、永遠の普遍性は卓抜していた、と大室著はいう。なぜなら時代は戦国的な混沌と自由が再来していたにもかかわらず、人びとは、世界解の全体を構成しなおす想像力をもっていなかった、というのである。社交に快樂をもとめ、隠逸に慰藉をえる。いわゆる魏晋の玄学もしくは清談の文化現象が意味するところはそこにあつた、と大室著は語るのである。

青木正児『支那文学思想史』「外篇 各論」（昭44・12・25、春秋社）は、「清談 一 清談の興起と名理派（魏）」で次のように規定している。

清談とは道家思想に根拠して、各自其の悟道を談論し、妙理を剖析することである。

青木著は以下に、「一 析玄派（魏）」「二 曠達派」の二派をあげ後者に竹林七賢を含めているが、小西著Bではこの「曠達」という名づけかたに漢民族の懐のふかさを見たところである。そして青木著の「四 西晋の清談」「五 東晋の清談（附）宋・斎・梁」――。

魏王朝を奪った司馬一族の晋王朝は、あの潘岳（字は安仁^{あざな}）の生きた時代でもあつた。その恐怖政治の世風――時代精神の風尚と談理を、しかし狩野直喜『支那文学史』（70、みすず書房）は美化しない。第四編第三章「太康文学」の第三節で、著者はその美貌を伝えはする。が、詩文について口を極めてほめあげる一方で、人柄については遠慮会

積しない。

然れども彼れの人物は決して其の詩に於いて見る如くならず。之れに反し浮薄の才子にして、且つ利欲の念深し。彼れは賈謚と云へる者に詔ひ、

といい、次のように断じている。

「閑居賦」などを作るは柄になきことなり。

だが、日本の王朝が『遊仙窟』をとおして潘安仁らの美貌と風流に惹かれたことは、さきに見たとおりである。

七 二日物語―西行

崇徳帝の雲間の郭公の御歌特に我等が心を惹きて悽愴の感胸に湧き、人とも顔見合はして坐に当時の御光景を想ひ浮めまつりぬ。（「まき筆日記」明治23・4・12―5・18―6・2）

露伴が大正五年四月号から雑誌『新修養』に連載した「文章講義」に、一〇月号「白峰御陵」、一一号は上田秋成「浅茅が原」、六年三月号に「保元物語」の文章をあげている。いずれも「二日物語」にかかわるものであるが、なかでも「白峰御陵」は『撰集抄』をひいて解説と注とをつけたものであり、露伴が「二日物語」を書いたころの気組みがうかがわれるように思われる。

白峰拝墓の事を記するもの、此書を最初とし、後に上田秋成これによりて雨月物語に記し、曲亭馬琴また此書と

保元物語の意とによりて弓張月に記し、謡曲作者は二作に先立ちて松山天狗一篇を成せり。事同じくして筆異に、一月にして各影なり。文を学ばんとするもの、比較研究の好公案を得といふべし。

柳田著Aはいう。露伴の「二日物語」が『撰集抄』に大体よつたものとしても、その他にも、『円位上人伝』『西行一生涯草子』『西行物語』『山家集』等を読破しての上であることはいふまでもなからう。柳田著はさらに沼田頼川著『評釈・二日ものがたり』（明39、東亜堂）を紹介している。扉の次にかかげた「沼田平治様」あて露伴の書簡によつて、弘法大師の『十住心論』や崇徳上皇の藤原俊成あて長歌などをあげ、十分基づくところがあつて西行や崇徳上皇の心境を描いたのだとする。これは六月十日づけの手紙であり、「御解釈おほよそ穩当的中」といつてその他の資料についても注意をうながしたものである。頼川の注釈は阿弥陀経など多くの仏典に及ぶものであるが、近代にあつて小説の五年あとに評釈が出たということ自体がすでに異例である。

露伴の創意は「彼一日」において、より明かであろう。『撰集抄』第九の第十話「於長谷寺逢故人」は初瀬の真言宗豊山派総本山を舞台とすることで空海以来の真言宗に一本筋をとおし、陰曆一〇月上旬―神無月上の弓張り月のころを借りて馬琴の『椿説弓張月』に会釈した気配がある。しかし「此一日」のような武張つた説話ではなく、これは尼となつた旧妻との再会であり、むしろ『源氏物語』『玉鬘』の巻、九州から上つた玉鬘と右近たちが観世音のおかげで、母の死後をまもる豊後介たちと再会する場面を思わせる。そこに『雨月物語』にかよう、しみじみとした情趣もあり、露伴の詩もあつたらう。

ただし露伴は、秋成における捨石丸や樊膾や為朝、あるいは『雨月物語』『仏法僧』のおどろおどろしい怨霊と天狗

と修験道とを顧みなかったのではない。『太平記』卷二十七の「雲景未来記」や天狗ものを含めて注意を怠らなかつたことは、最晩年の『蝸牛庵聯話』（昭18、中央公論社）における「舞」「義経、弁慶」「山伏」を見ても明かなことであつた。

八 田植うた―芭蕉

露伴が芭蕉研究で活発に発言するようになったのは、大正九年一月号の『潮音』が始まりらしい。短歌雑誌とはいながら、『潮音』は一時、芭蕉研究誌のような印象があつた。主宰の太田水穂みずからが「短歌立言」を連載して良寛を語り芭蕉を論ずる。露伴の考証が毎号を飾る。大正一〇年新年号からは「芭蕉俳句研究」が掲載される。出席者は、沼波瓊音・阿部次郎・安倍能成・太田水穂・幸田露伴。筆記は山下秀之助。ただし露伴は座談会の記録に後から書き加えて句評をしめくくる形をとり直接姿は現さなかつたものらしい。六、七回ころから小宮豊隆や和辻哲郎も加わつて、さながら漱石山脈が、大正五年一二月の漱石没後、三年ほどの間において、やがて露伴の学徳を仰いだ観がある。

「芭蕉俳句研究」は大正二二年八月の第四二号をもって終わり、八月号から「芭蕉連句研究」へと発展する。露伴の注釈は昭和二二年の没年に完結しその後は全集に収められた。文壇登場作「露団々」このかた、芭蕉との長い付き合い合いであつた。が、露伴の芭蕉研究は、それ自体が独立した一個の主題である。

ここでは明治二三年当時の露伴の心的動揺にかかる芭蕉「風流」句のみを吟味したい。

風流の初やおくの田植うた

いま頼原退蔵・尾形仿訳注『おくのほそ道 附現代語訳／曾良隨行日記』（昭24・9、角川日本古典文庫——以下、頼原・尾形訳注）へ本文評釈「須賀川」の条に従えば、

白河の関を越えて耳にした鄙びた陸奥の田植歌、それが今度の旅で、本格的な奥州路にはいつて最初に経験した風流であつた。

とある。ただし、等躬への挨拶の句である、と久富哲雄『おくのほそ道 全注釈』（80・1、講談社学術文庫452）はへ解説する。『おくのほそ道』本文では、白河の関越えの句として披露したことにしてあるが、曾良『俳諧書留』の前書によれば等躬への挨拶の句である、という。挨拶の句だとすれば、芭蕉には『おくのほそ道』冒頭の「白河の関越えんと」を正面から受けとめるだけの句がなかったことになる。それにしても、同じ『俳諧書留』（『曾良書留』）にあつた次の一節の「旅心定まりぬ」が奇妙である。

心許なき日かず重なるまゝに、白川の関にかゝりて旅心定まりぬ。

芭蕉は『おくのほそ道』に文を舞わせることで白河の関を越え、それで「旅心」が定まったとしたのであろうか。のちに『おくのほそ道』をまとめる時、それでは芭蕉がひそかに顔赤らめていたことになりはしないか。

しかし、阿部喜三男著・久富哲雄増補『詳考奥の細道 増補版』（昭54、日栄社）が提供する諸説を見るかぎり、この芭蕉の挨拶句についてほとんどが「初め」をめぐる時間説・空間説の吟味に終始しており、「風流」と「田植うた」

にふれていない。『おくのほそ道』自体に「風流」「田植え」「早苗」の句がなかったのではない。「風流」「田植え」「早苗」にかかわる事項を、今栄蔵『芭蕉年譜大成（平成6・6）』その他をかりて列記すれば次のようになる。

- | | | | |
|-----|--------------------------------------|------|------|
| 1 | 田一枚植えて立ち去る柳かな（『おくのほそ道』） | 4・20 | 遊行柳 |
| 2 A | 早苗にも我色黒き日数かな（『曾良書留』） | 4・21 | 白河の関 |
| 3 | 風流の初めや奥の田植歌 翁（『曾良書留』） | 4・22 | 須賀川 |
| 4 | 旅衣早苗に包む飯乞はん ソラ（『曾良書留』） | 4・24 | 須賀川 |
| 2 B | 西か東か先早苗にも風の音（白河藩士何云あて書簡） | 4・24 | 須賀川 |
| | 風流のむかしに劣ふる事本意なくて | | |
| 5 A | 五月乙女に仕形望まん信夫摺（『曾良書留』） | 4・24 | 須賀川 |
| | 風雅の昔にはれるをなげきて | | |
| 5 B | 早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺（『真跡懐紙』） | 4・24 | 須賀川 |
| | させる風情もみえずはべれども、さすがにむかし | | |
| | おぼえてなつかしければ | | |
| 5 C | 早苗とる手もとや昔忍摺り（『芭蕉庵小文庫』） | 4・24 | 須賀川 |
| 6 | さればこそ、風流のしれ者、ここに至りてその実を顕す。（『おくのほそ道』） | 5・2 | 宮城野 |
- 1の遊行柳の句については、額原・尾形訳注〈本文評釈〉殺生石・遊行柳の条に拠りたい。――名歌の柳の精にせめて

は奉仕する手わざとして、田一枚を植えて立ち去る自己の旅姿を夢幻劇に形象化した。謡曲『遊行柳』を念頭において、西行に寄せる思慕の情を俳諧的に表現した句である——。ただしその〈発句評釈〉によると、措辞に不備があり成功の作とはいいがたい、という。

それに比べると2の句は白河の関の本文に載らなかつた。本文は「氾濫する古歌の一つ一つを塞き止め反蕪することによって、関越え、陸奥入りの詩情をたしかめることに主眼がかかつていた」（頼原・尾形訳注）気配があり、曾良の句をかりて結びとしている。その曾良の『随行日記』によれば、実状は朝の霧雨から小雨・快晴と天候さだまらな中、古関・新関と一日尋ねまわつたものらしい。結局は、

みちのくの名所々々、心に思ひこめて、まづ関屋の跡懐しきままに古道にかかり、いまの白河も越えぬ

早苗にも我色黒き日数かな（『曾良書留』）

3の風流の句は、遊行柳と白河の関——二つの歌枕のあとを受けて、1から6までの「田一枚」「早苗」「風流」「田植うた」「五月乙女」のただなかに据えられた。旧暦の四月二〇日から五月二日まで、折から日本列島を北上していた田植の共同作業のさなかに、芭蕉と曾良の二人も、古い歌枕を探りつつ雨がちのほそ道を奥へ奥へと北上したとおぼしい。そして須賀川の駅につくと、「まず」さつそく、歌枕のことを宿の主人等躬に問われている。——白河の関いかに越えつるや。それに応じた芭蕉の3の句は、前後に言訳めかした言葉をめぐらして、それ自体が主人等躬への挨拶の句であるとともに、古い歌枕へ挨拶し、新しい風流——奥の「田植うた」へも挨拶した気配である。

白石悌三「おくのほそ道」の構想（昭43・12『立教大学日本文学』第二一号—昭44・11『日本文学研究叢書』へ芭

蕉〈収録〉は、論のはじめに露伴「客舎雜筆」(明23)をひき、『東関紀行』を範とする紀行の形式と、仮住をめぐる中世の鎮魂・近世の景情融合の矛盾する主題、とを指摘した。矛盾する主題を時として自覚したとき、俳諧が、風狂が、笑いが生まれる――。その論考をついだ「もう一つの「細道」」(昭53・12『文学』―昭52・8『日本文学研究叢書』芭蕉II〈収録〉)は次のように述べる。

陸奥への関門である最大の歌枕に挨拶を欠いた主人公が披露した発句が「風流の初めや奥の田植うた」であった。(中略)「みやび」でなく「ひなび」を、「雅」でなく「俗」を「風流の初め」と認めて陸奥入りの挨拶にした所が『おくのほそ道』の俳意であった。宮城野の章における「さればこそ風流の」は、この俳意を受けて成り立つ表現なのである。

3の句の「風景」に近世の景情融合を、「懐旧」に中世の鎮魂を読み取ることができそうである。また、6の文に俳意を感じることは容易であろう。

須賀川に足かけ八日逗留する間に2の句が推敲されたように、5の句は前書きとともに三様の形をみせた。このことについて、広末保『芭蕉 俳諧の精神と方法』(93・11、平凡社ライブラリー30)は、「芭蕉――歌枕と経験的な時間」の節で、しのぶもぢ摺の石を里人が谷につき落したという童部の話に、芭蕉が耳傾けて「さもあるべき事にや」(さもあるう、さもありそうなことだ)という言葉を最終的に選びとった、と解している。この一節、軽い非難であるという歌枕本位の解が従来からあるところであり、何か含みのある俳味が感じられる。

が、問題は「田植うた」である。須賀川逗留中の二四日、『曾良書留』に次のような記録が見える。芭蕉と曾良は「田

植の日」のただ中、田主の等躬―相楽伊左衛門宅の「目馴れぬ寿」の場にその日、居合わせていたことになる。

この日や田植の日也と、目馴れぬ寿などありて儲けせられけるに

旅衣早苗に包む飯乞はん ソラ

内山一也『鑑賞奥の細道』（昭60・4、笠間書院）は、『随行日記』にある「主の田植」と『俳諧書留』の「風流巻」の曾良の後書とをひいて考察する。

田植唄というものは労作歌であるとともに、田植がすんだあとの慰労、祝宴に伴う祝い歌でもある。芭蕉が聞いた奥の田植歌はどんなものかわからないが、例えば〔田植草子〕（日本歌謡集成近古篇）の

けふの田主は田の嵩を植えてな

八つなみに蔵をたて徳を招いたり

作り靡けて四方に蔵をたてうや

という一節を、〔玉勝間〕（本居宣長・寛政5起稿）の「みちのくの田うゑ歌」の中の、

けふの田うゑの田ぬし殿には

金の白が七から

七から八からまして立たは

長者殿にもますべし

という一節と比較してみると、時代が変わっても、あまり変わりのない「田植歌」いうものの、一つの流れをみ

ることができる。

民謡研究から芭蕉の須賀川句にふれているものとして、浅野健二『日本歌謡の発生と展開』（昭47・1、明治書院）をひけば、第二編「中古歌謡の考察」の四「平安朝の労作歌謡」2「田植唄」があげられよう。田植唄には二系列ある。

1 実際の作業唄としての田植唄

2 田遊・田舞に用いられた田耕の歌―鑑賞（田楽と称するショー）

田歌切Ⅱ「美濃田歌」をはじめ尾張・筑紫・陸奥―雑芸のひとつ田歌

後者2では今も御田植祭が執行されているという。すなわち、大阪府の住吉神社、三重県の伊雑宮、千葉県の香取神宮ほか、である。また民間には民俗芸能として、田遊・田植踊（今日東北地方で小正月に）・春田打があるという。

元来田植唄は、単なる労働のためではなく、出来秋の豊凶を支配する田の神に対する祈願・奉賛のための唄であつたためと思われる。

この田の神（サンパイ）信仰を中心とする田植の共同作業（ユイ）の形態をいまなお伝存しているのが、中国地方の山間地帯に見られる囃田（大用^{ママ}植・花田植）である。

ここにいう中国地方の囃田については、渡辺昭五『増補版 田植歌謡と儀礼の研究』（昭54・12再版、三弥井書店）に耳かたむけたい。同著は、第一章「田植歌とその背景」の二「田植歌謡の組織」3「みちのくの田うゑ哥」でいう。

今日古い田植歌が組織を整えて残っているのは、中国地方の『田植草紙』を中心とするものだけであつて、あ

とは散発的に短詞章が『巷謡篇』とか『鄙廼一曲』とか『風俗問状答』などに、たまたま偶然に留められた位のものである。しかし、寛政十年（一七九八年）に上梓された本居宣長の『玉かつま』の第九卷に、偶然にも『みちのくの田うゑ哥』として、伝承者不詳のまゝまながら（雪瓜園耳得の俳文集「芙蓉文集」に同じ「奥州田植うた」がある。俳諧文集第十九編所収）。

陸奥の田植哥とて、書たるを、人のみせたる

として、奥州の田植歌を全文収載してあるのは、田植歌資料の貧困な今日からみると、洵に好運なことであつた。その全文をこゝに再び記して、組織の一面から中国地方『田植草紙』系のもものと比較検討してみたい。

すなわち、

弥十郎（1—2）・なへとり（3—4）・朝はか（5—7）・昼上り（8—10）・曲（11—13）・夕暮（14—15）・上りはか（16—17）

を示している。

以上で詞章は十七、田植の労働と歌の時間的關係が上述の如くとするならば（七五頁）、一日の田植にはほゞ適當な数である。新旧の錯綜を極めた田植歌も、細長い我国の北と南において二百年以上も前にこのように持ち伝えられたものを比較すると、その類似点や相違点がよくわかる。

さきに浅野著が三重県の伊雑宮の田遊・田舞―田植唄にふれていた。それはかの浦島子伝における『風土記』系―海宮往訪譚にかかわるものであろう。また、本居宣長が奥州の田植唄を記録していたことにも注意したい。それは芭蕉

が耳にしたであろう「田植うた」を、さほど隔たるものではないからである。芭蕉の「風流」はもともと奥の細道のその風水の気を伴うものであったかと思われ、露伴の「風流」句理解に、これはかかわることであろう。

なお、「風流」にいわれる田植の飾り物を一度は想いみておきたい。郡司正勝『風流の凶像学』(87、三省堂)によれば、山とは、その共同体が演出する見立ての飾りものである。山―笠―傘―雲といった形象に託された想念があり、その想念のための工夫・趣向が「風流」にほかならなかった、とするものである。

九 風来山人―談義本

江戸期の浮世草子、そして平賀源内―風来山人の談義本『風流志道軒』以来、露伴がひさしぶりに、しかも立てつづけに風流を冠した作品を書いた意味はなかなか軽くはないようである。しかし、露伴は風来山人に冷たかった。

たとえば、森鷗外が発行した文芸雑誌『めさまし草』に連載された「標新領異録」というタイトルの合評記事を見よう。明治三〇年五月から翌年四月にかけ断続しながら載ったもので、とりあげた六本のうちに『神霊矢口渡』がある。

村井長庵巧破傘・好色一代女・水滸伝・浮世道中膝栗毛・神霊矢口渡・琵琶記

合評に集ったのは、鷗外と三木竹二の兄弟をきも煎り役として、依田学海・尾崎紅葉・幸田露伴・饗庭篁村(竹廼屋)・森田思軒であった。合評のタイトルが含む「標新領異」の四文字は、滝沢馬琴の読本『開卷驚奇俠客伝』の第二

集巻之一の「引」に見える。同人たちには、先刻承知のことであつたらう。「引」は序文の意である。漢文仕立てで「蓑笠漁隱」の雅号を用いたのは、この作にかけた馬琴の氣負いでもあつたらうか。しばらく書き下しの形で抜き出し、問題の四文字を漢字のまま写してみよう。

唐山ハ（中略）批評有リト雖モ、然レドモ作者ノ隱微ヲ發明シテ、論弁謬リ無キ者、幾ンド稀ナリ。予ヲ以テ之ヲ觀レバ、羅貫中ガ三国演義、高東嘉ガ琵琶記ノ如キ、独リ声山毛氏有リ、標新領異、啓蒙解疑。評注大得趣。つまり、中国には作品についての批評は多いけれど、作者が作中にひそませた「隱微」を読み取つて誤りなく論じたものは少ない。馬琴が見るところ、羅貫中「三国志演義」と高東嘉「琵琶記」について毛声山の論があるだけだ。「新ヲ標シ異ヲ領シ、蒙ヲ啓キ疑ヒヲ解ク。評注大イニ趣ヲ得。」——毛声山の見識を持ち上げながら曲亭馬琴みずからの批評用語「隱微」を披瀝したものであろう。

文中の「評新領異」が合評記事のタイトルにされたほか、『神靈矢口渡』の評（明31・1・30 卷之二十五）では篁村が「隱微」という用語を説明ぬきで使っている。すでに明治三〇年代のはじめである。江戸期に行われた小説・戯曲を文芸誌『めさまし草』の合評にとりあげたのも古風なら、「隱微」も古風であろう。合評の同人の顔ぶれもまた古風といえは古風ではあつた。いちばんの年かさは学海である。時に天保老人と自嘲して老熟したさばきを見せていたが、総じて篁村の誉め言葉、露伴の冷淡評、鷗外の史実本位の難の、それぞれを認め、とりなしてその場を収めた氣味がある。

焦点を、この合評と風来山人とに対する露伴の姿勢に移そう。露伴が終始氣乗り薄だつたように思われるのである。

『膝栗毛』と『琵琶記』には顔を出していないし、『村井長庵』ではなにか投げやりな口調がある。『水滸伝』がいくぶん身を入れた感じだろうか。西鶴については一目も二目も置かれていたはずの『一代女』にも、

露伴。評なし、句あり、

浪華鶴舞ふや八道春の風

だけで済ましている。『矢口渡』に至っては、「よろしきものとはさらにおもはず。」とまで結論し、合評にとりあげたのが不見識と言わんばかりであった。

露伴は『水滸伝』評ではすすんで元曲にも言い及んでおり、決して戯曲に冷淡な人ではない。一方、源内―風来山人が音曲にくわしかつたろうことは『放屁論』の前半に当時の音曲名を列挙してみせたことで、ほぼ見当がつく。江戸の市井に住む者なら知っていることを才気にまかせて並べたたのかも知れないが、独特の音感が認められる。節章の入り組んだ江戸浄瑠璃を、紀丈太郎がそばに控えていたにしても、源内―福内ふくち鬼外は素人の身で興したのである。日本古典文学大系の『風来山人集』（中村幸彦校注）では慎重を期して巻末に『神霊矢口渡』の節章解説（祐田善雄）を用意した。が、その音曲や浄瑠璃に露伴が疎かつたとは思われない。幸田家は母をはじめとして音感にすぐれ、妹に幸田延子・安藤幸子という芸術院会員の大家を二人だしている。

思うに、露伴は風来山人―平賀源内という人物に親しめなかつたものようである。同じ明治三十一年の七月、『矢口渡』評の半年後には秩父に旅し、九月創刊号の『中学世界』に「平賀源内」を含む八篇の短章群を寄せている。無関心な冷淡評ではなかつたようである。「平賀源内」でもその事績につき、

平賀鳩溪は功利をむねとしたる人なること言ふまでも無し。このごろ秩父に遊びて、源内秩父にて鉞掘りし由聞けるが、さる云い伝へあることにやと問ひたづねしに、

という。『中学世界』に寄せた雪中庵蓼太から荻生徂徠に及ぶ八篇を通して言えることは、生まれだちの気質や才氣にまかせて振舞うことを、そのころ露伴がようやく厭うようになっていた、ということである。あるいは、そのことは「標新領異録」のありようにわたる問題であつたのかも知れない。

五年後の「風来山人」（明36・5『学燈』臨時増刊号「机辺閑話」）では、親しめないながら、次のような同情ある見方に達した気配がある。

風来山人は生理上に何か異常な状態を有して居た人ではあるまいか。

たとえば『瘞陰隱逸伝』などの忌憚のなさは、磊落不羈放縱ばかりで解釈しないほうがよいだろうという。それではいながら数か月あと、小説「天うつ浪」の其五では、相場師の島木万五郎の口をかりて、風来山人の『矢口渡』を引いてこう言わせていたのである。

浄瑠璃の文句にある通り、琥珀の塵や磁石の針で、眼に見えて何処が何様といふ事は無いが、たゞ訳も無く引き寄せられて、心が其処へ行くのが恋の習ひだ。

「風流微塵蔵」の「うすらひ」（其十一）では、お静が雪丸を諭し、人間は虞蘭土^{グランド}や呂尚・孔明のように不器用に生きる器量が大事だと説く場面がある。

汝も知つている家の古屏風の貼り交の中にある彼手紙の書き人の平賀源内は、才氣にも勝れ学問にも巧者な男で

はあるが、器量小さく切々として功を求むる鄙しい意の絶ゆる間のなかつたため一生碌なことも為得いであつたら土に入つて仕舞ふた、可憐といへば可憐なやうな畢意ずれば小人だと、何時やらの土用干しの節益齋殿の評されたを聞いて道理と思ふたことがあるが、雪丸、汝は源内ごときものの亜流となつてよい気か、

思うに、明治三〇年代の露伴は風来山人から急ぎ離れつつあつたようである。すでに見たように、明治二〇年代の露伴は、悪態・嘲罵・風刺の作品に事欠かなかつた。いわゆる心的動揺の時期に風流を冠して書き継がれた、仏―魔―呵―悟、とくに魔―呵の世界である。桃花源を望みながら『遊仙窟』と『浦島子』の間を往還し、ともすれば前者の風儀―魏晋の玄学もしくは清談の文化現象に近いところに身を置いていたようである。たとえば幸堂得知・饗庭篁村らと遊んだ当時の、根岸党をここで連想するのは突飛であろうか。しかし、当代の幸田成行の胸の底にわだかまつていたかに見える毒念を見落とすわけにはいくまい。

「毒朱唇」(明23・1『都の花』一月下旬号)の女性が吐く悪態、それはやがて「混世魔風」(明23・11・13〜25『読売新聞』)の織々が摩訶羅陀国の警視統監に訴える長広舌と化すだろう。「毒朱唇」の女性が山中にこもつて釈迦に懸想するのに対し、「混世魔風」の織々は操をまもつて投身し竜王に救われた身である。訴えは水中の摩訶羅陀国の風儀をいきどおつたものであるが、第十回に至つてにわか地上の世界を思わせるキナ臭い名前が目白おしに口をついて出てくる。いわく、

二正太夫・伽奇賀羅坊・尸武沙婆・尼保牟橋区・姑尾吃坊・月地・銀在坊・与誌坊・屍多耶・迷岐市・牟迦賦志
摩・慾浜

など。これが正直正太夫（斎藤緑雨）や蛸殻町・渋沢・日本橋区・木挽町・築地・銀座・葎町・下谷・根岸・向島・横浜をさし、花街を諷したこと疑いない。「五重塔」（明24〜25『国会』）の飛天夜叉王の叱咤を思うべきであろう。

「混世魔風」はそれに先立つ「一陣風」（明23・11、8、9、12『読売新聞』）とともに、緋々が水死して異界をめぐる点で、平賀源内の滑稽本『根無草』（宝暦13、明和5）を思わせた。また、露伴の「風流魔自序」（明23）と「艶魔伝」（↓明24風流魔）は組立が源内の『風流志道軒』（宝暦13刊）を思わせる。『根南志具佐』（前編）は、市村座出勤の女形荻野八重桐が舟遊山で溺死した出来事を地獄めぐりの談義風に仕立てた風刺ものであり、途中、竜宮城からおしのびが遊里や歌舞伎の悪所をめぐる。『根無草後編』（明和6）の場合は、市川雷蔵と坂東彦三郎の死を談義本に仕立てた弄文であり、中で十王と弘法大師が遊里評をかかわす、うがちがある。『風流志道軒』は浅草奥山の舌耕家として知られた深井志道軒を主人公に据えて、これまた諸国遍歴にうがちと諷刺とをつづったわざくれである。

露伴の首都計画論「一国の首都」（明32・11―12『新小説』）は、もと陶淵明の『桃花源記』に描かれた塢、水辺の城・郭に拠る中国の都市理念に通うものを無意識のうちにその談義に潜めてはいなかったかと疑われる。それは、墨田川の向島から北千島に赴いた次兄郡司成忠の屯田事業（明26・3〜大9）とまったく無縁の発想ではなかったろう。だが、まかりまちがえば風来山人の悪態と毒念に堕ちかねない危うさから出たものであったかも知れない。露伴をその無限否定の危うさから救ったものを思ってみよう。

露伴に「伊能忠敬翁」（明26・5『少年雅賞』）と「伊能忠敬」（明32・8、博文館『少年読本』）という文がある。東書文庫（東京都北区）所蔵の教科書を見ただけでも「伊能忠敬の晩学」と題して三一篇、「伊能忠敬」と題して八篇

ある。露伴の忠敬伝の優れた点は、明治二六年という時期に伊能忠敬を天文学史に位置づけて、高橋至時から麻田剛立⑥にさかのぼる先人の地味な努力を公正簡潔に述べ、翁への敬愛を深めたところにあるだろう。年若な読者のために当時二六歳の青年が書いたのである。

東京芝区の芝公園に、屹然として聳えたる丈いと高き記念碑あり。

と語りだし、おわりに浅草源空寺の墓にふれ結びとして明治一六年一月の、

地学協会々頭北白川宮上奏文

と贈位宣下の御達とを掲げている。明治三二年の「伊能忠敬」は六年前の露伴自身を数等超えたところに達したかに思われる。この前後数年の露伴の文業を総体として読みあわせてみると、露伴自身が変わりつつあったようである。たまたま源空寺の墓地には、東岡高橋先生の墓と東河伊能先生（忠敬）の墓の向かってすぐ左手に幡随院長兵衛墓なるものがある。露伴は長兵衛の華やかさを無用のものと考え、伊能先生の一生の行状の「奇なところも無く怪なところも無き」ところを真実尊いものとしたようである。墓が並んでいるからという思いつきではなかったらしく、また、年少の読者のために文を舞わしたわけでもなかった。

試みに「其三」を見よう。露伴は「世に才気ある人は多し、才気ありて徳量ある人は少し」と言い、忠敬先生とほとんど時を同じくした平賀源内の如きは、と、文中の紳士に語らせている。露伴が源内を嫌うようになっていたことは、この時期の文章に照らして言えることであり、ほとんど二べもない。忠敬先生が五〇歳で家の子の景敬にゆずるまでを、むしろ露伴は敬重している。

先生自ら抑へて敢て平々凡々の人と為りて、一意専心たゞ伊能家の衰へたるを興し、

という趣旨を紳士にくり返し言わせ、市井の凡人に伍し、三〇余年その才を現すところなかりしは「実に先生が徳量の大なるを証せりといふべきならずや」と強調させている。

単なる天文学史ではなく、学問や世の出処進退について、重厚篤実な行蔵を学んだようである。高橋東岡の師、麻田剛立についても、「ひたすら実験を本とし思索を頼りとして」前後四〇年を苦学のうちに過ごしたという。豊後の国の杵築侯のもとを脱走して大坂で町医となったことについても言う。

前に主家の命に応ぜざりしは節操の堅固なるなり、後に諸侯の聘に応ぜざりしは心術の醇正なるなり。

学が大成するに伴つて名が伝えられる。しかし学問のために脱藩した初心を、かつての畑齋綾部安正―剛立は、杵築侯のためにも忘れなかつた。一方、平賀源内は高松侯をさるとき他へ仕官の儀を御構―仕官懸命の途を封ぜられ
ており、生涯そのことに思い煩うのである。

なにが露伴をして『遊仙窟』風の小説と清談、風来山人式の嘲罵と風刺から遠ざからしめたのだろうか。むろん近世日本天文学の先人たちそれぞれの生き方に学ぶところがあつたらうとは思ふ。あえて忖度するならば、明治二六年三月に次兄郡司大尉が報効義会を組織して北千島に移住したこと。それは当然のことに測量学と天文学の実技^⑦を伴い、地学協会との連携をうながしている。そして、才気よりも平々凡々たる徳量が義会の活動をささえている事実を知つたろう。「露団々」に見られたブンセイムの事業は、心的動揺期のおびただしい職人物を経て、ようやく平賀源内風の才気を洗いおとしたものと見える。さらに明治二八年の山室幾美子との結婚。その妻の忠言に従つて将棋を廃した露

伴は、忠敬先生が囲碁をみずから廃した雄心を思つたろう。

むろん「一国の首都」の露伴は、のちの「望樹記」(大9・10―11―12『現代』)ほどあくぬけしてはいないが、『読売新聞』その他にたてつづけに魔法を諷して短編をのせた、明治二三―四年のころ険しい露伴ではない。が、源内ぎらいになった分だけ、露伴の自己嫌悪は深刻であつたろう。露伴の風流には、もともと風狂と談理とが潜んでいたように思われる。

十 微塵―蔵

露伴が長編「天うつ浪」(明36・9・21―37・2・10、37・11・26―38・5・31『読売新聞』)を中断したまま創作から遠ざかるのに入れ違いに、泉鏡花の長編小説『風流線』(明36・10・24―38・3・12『国民新聞』)『続風流線』(明37・5・29―10・5『国民新聞』)が登場した。露伴以後、風流を冠した小説はいわゆる大衆小説に少なくないことは、さきの岡崎著Bからも明かであろうが、鏡花の『風流線』は風流の趣きが荒々しく、風流組と名乗る無頼めいた集団が作中荒れまわる点で、「雲の袖」における義賊蛸崎十郎など、露伴「風流微塵蔵」の群像を思わせる。鏡花の白山鞍ヶ嶽が日光華嚴の滝と通底するという地縁からは、これも露伴の「天うつ浪」にかかわるものがある。風流組は、加賀の白山を源流とする取手川の流域に鉄道工事をすすめるのが仕事だから、題名の「風流線」に不思議はない。しかし彼らがかつぎだした頭目は村岡不二太といって、先ごろまで金沢と鶴来の途中、東方に暗がりそびえる鞍ヶ嶽に死

んだ気で籠もっていた青年である。実は三年前に哲学上の煩悶をかかえて日光の華嚴の滝に身を投げた、とされているのだが、恋に未練があつた。滝のそばに残した暗号から不二太の生きていることを知った恋人のお竜がはるばる東京から鞍ヶ嶽めぐりしてやつて来て、再会する。それを境に俄然、風流組の頭目と仰がれることになった、という。かなり奇妙な設定であり、実在の青年藤村操を連想させる名前や、白山・鞍ヶ嶽と日光・華嚴の滝とを修験道の縁でつなげようと執心する鏡花の発想は、検討に値しよう。

霊場日光の開基は、『おくのほそ道』の「日光」の章では空海にしている。

往昔、この御山を「二荒山」とかきしを、空海大師開基の時、「日光」と改めたまふ。

じつは勝道上人が開山である。ただし空海は勝道の碑文撰述のため山内を歴遊したことがあり、その『遍照發揮性靈集』の巻第二の文章には霊地を実際に踏んだ者の迫力が感じられる。同文によれば、華嚴の滝が発見されたのは天応二年（七八二）三月、沙門勝道が雪をふみ二泊がかりで男体山の山頂に立ったとき以降のことらしい。桓武天皇の治世になって一年たらず、この時は北関東の眺望をほしいままにしたが、華嚴の滝を直接眼にしたかどうか。二年後の延暦三年三月下旬には中禅寺湖、あの折に俯瞰した南湖をただちに目指したから滝を目撃したことだろう。四月上旬、南湖に小舟をうかべ二、三人の弟子と遊覧したという。

池中の円月を見ては普賢の鏡智を知り、空裏の慧日を仰いで遍智の我に在ることを覚る。此の勝地に託いて聊か伽藍を建つ、名けて神宮寺と曰ふ。

（見池中円月。知普賢之鏡智。仰空裏慧日。覚遍智之在我。託此勝地。聊建伽藍。名曰神宮寺。）

日本古典文学大系本の訓読に従つて「沙門勝道山水を歴て玄珠を瑩く碑序を并せたり」（沙門勝道歴山水瑩玄珠碑并序）を朗誦すると、勝道たちが南湖のほとりで小舟を刻んだ木の音が今もこだまする思いがする。二荒山は補陀落信仰の霊山であつた。池中の円月、普賢の鏡智。その南湖から落下する第一の滝は華嚴と名づけられた。大谷川の溪谷に沿つて阿含・般若・方等と、順に仏典の名が与えられる。言うまでもなく、華嚴は『華嚴経』、もつとも尊いとされる仏典であつた。

『大方広仏華嚴経』「盧舎那仏品第二の二」の冒頭、普賢菩薩が蓮華蔵世界を大衆に分別し開示する言葉に瞠目する。諸の仏子よ、当に知るべし、此の蓮華蔵世界海は、是れ盧舎那仏、本菩薩の行を修せし時、阿僧祇の世界に於て微塵数劫に嚴浄したまひし所なり。一一の劫に於て、世界の微塵に等しき如来を恭敬し、供養したてまつり、一一の仏の所にて、世界海微塵数の願行を修したまひしなり。（大7『国訳大蔵経』第五卷）

まことに広大で豊かな世界像である。蔵といい、海といい、微塵といい、微塵数という。露伴の未完の小説「風流微塵蔵」が本来めざした世界を思ふばかりである。露伴はその小説の「引」——序文で、自分の内面にあるものを文につづるに当たつて、中国風に「経」とも呼びかね、西洋式に「線」とも言いかね、「蔵」と称することにしたという。内面の雲のような思い、夜のような気配、その半明半暗の状態を経にも緯にもつなぎかねた——。いわば立体的な内言の世界である。

蔵を標するに微塵を以てするは、其極めて小なること猶一微塵のごとくになると、兼ては華嚴に所謂破塵出経巻の義とに取るなり。

露伴「風流微塵蔵」の題名が『華嚴経』の「微塵」にちなむこと明かであり、ライブニッツ G.F. Leibniz のモノダ論を思わせる精妙な世界認識が暗示されている。ただし露伴自身は謙遜して「我淨慧淨眼の人にあらず」という。知恵も眼識も不十分だから「品花標月」――、花の品さだめと月の評とに満足して小文字を「羅織し出す」にとどまるものなり。そこで風流の二字を小説の題名にかぶせた、というのであった。

――昭和二年七月九日から一二日まで三泊四日、露伴は東京日々新聞の企画「日本八景」の一つ日光に遊び、紀行文「日光」を書く。それが八月一日号の「一」から八日号の「八」まで同紙に分載される。が、折も折、掲載前の七月二四日に芥川龍之介が自殺し、翌二五日の十一面はベタにその記事で埋まってしまった。時代は前年の末に大正から昭和に変わったばかりであり、大仏次郎の連載小説「赤穂浪士」は折から松の廊下の章にかかっていた。紙面全体が去り逝くものをあながちに責める空気ではない。そんな読者の目に次のような文字がとびこんだのは是非もない。

無理に滝の上へ出て生命を粗末にしようとする狂人共(三)

明治三六年に藤村操がとびこんで以来、道勝上人ゆかりの霊場が自殺の名所になってしまった。それはいかにも、あさましかつたらう。すでに奥日光「縁外縁」(対髑髏)の露伴ではない。紀行文もまた古人にならって舟を南湖の風水にうかべたのである。

中禅寺の区長に迎へられて、人々と共に宿に還ると直に湖に泛んだ。モーターボートで湖を一周しようといふのである。(中略)

勝道上人は日光の開山者で、日光を開くために前後数十年を費し、それまでは世に知られ無い神秘境であった

のを遂に開いたのである。その事は空海の性霊集中の碑文に見え、またそれによつて書いたと見える元亨釈書にも見えている。(五)

かえりみて『露団々』から「風流微塵蔵」まで。題名の示唆するものは一筋道であつたように見えるが、しかし考えるべきことは多い。主題は始まつたばかりである。

あゝ、大露伴今や亡し、私は、せかず、ぜひよめといった「華嚴経」でもかぢり読みしつゝ、そろそろと驚鈍をつくしていかうと思つてゐる。(昭和廿二年九月三十日 柳田泉『幸田露伴』「はしがき」)

注

(1) 笹淵著『浪漫主義文学の誕生』「幸田露伴」のこの説に後出の二瓶著は慎重である。従いたい。なお二瓶愛蔵『若き日の露伴』(昭53、明善堂書店)「序章 鷗外と露伴」の「一 希有な出会い」は森銑三『明治人物夜話』(昭44、東京美術)をひいて、鷗外の母を清少納言、露伴の母を紫式部と言つていたという井上通泰の話しを示している。露伴がその母の手で剃髪したことを思えば、紫にちなむ斎藤紫英のことは挿話にとどめておくのが穏やかであろう。

(2) 同じころ『文学界』の同人に西行和歌の受容の動きがあつたが、いまは主題を「風流」にしほりたい。山本幸一『西行和歌の形成と受容』(昭62、明治書院)の「第四章 西行和歌の受容と西行資料」の「三 西行受容史稿——「文学界」前後」および「四 西行和歌の受容——独歩の場合——」参照。その(四)は北村透谷の日記(明23・3・16)から「西行伝」成らんとす」をひく。なお、その「別表Ⅱ」「別表Ⅲ」参照。

(3) 八木沢元『遊仙窟全講』増訂版(昭50、明治書院)参照。

(4) なお白川静『漢字の世界』(全三巻、76、平凡社、東洋文庫281、286)「第三章 神話と背景」第一章「原始文字」参照。

- (5) 小西著 A (『日本文芸史』Ⅳ、'86・10)「中世の晩秋へ」の「二「雅俗」の達成と新生」は、「(3) 新しい雅俗への試み」の「(イ) 談義本と平賀源内」で触れている。「いずれも批判性をもたずたんに談義本の形姿を借りた作品」「言語の本性を多義性において認め」
「かれが実行したのは、世相・風俗を論じながら、何ひとつ批判しないことだったのである」――。なお、スミエ・ジョーンズ「文体としてのポルノグラフィ―平賀源内の戯作と風刺―」(94・11『江戸文学』13、ペリかん社) 参照。
- (6) 上原久『高橋景保の研究』(昭52、講談社)、大谷亮吉『伊能忠敬』(大6、岩波書店) など参照。
- (7) 郡司成忠「占守島に於ける報効義会の事業」(明30、『地学雑誌』第十号)、別所二郎蔵『わが北千島記』(昭52、講談社) など参照。